

手芸品と語らいと笑いが生まれる「いきいき教室」 ～いわて生協「グループ活動費用補助」を活用

○「働くことに夢中で、針仕事なんてしたことないの」

岩手県宮古市の高台にある弘川仮設住宅。その一角にある談話室から、賑やかな笑い声が聞こえてきました。毎日、午前9時過ぎから午後3時ごろまで活動している「いきいき教室」の皆さんです。

現在のメンバーは6人。お手玉やひざ掛け、バッグ、鍋カバー、帽子などの手芸品を丁寧に作っています。

お伺いした日は縫い針などを刺しておく針刺しやティッシュボックスケースなどを製作していました。「働くことに夢中で、みんな震災前は針仕事なんかしたこと

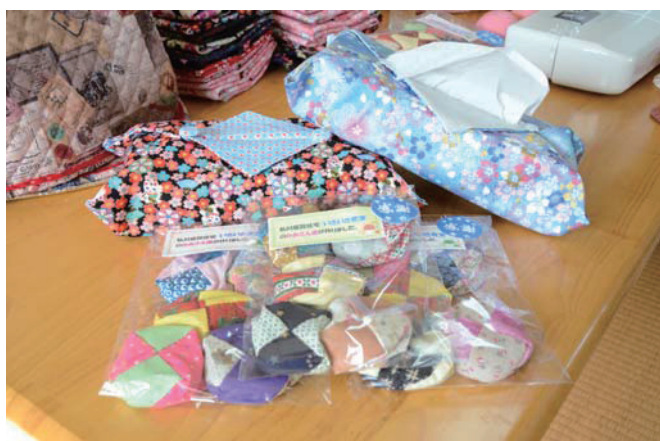


「いきいき教室」の皆さん。左から奥 良子さん、長谷川節子さん、盛合栄子さん、長洞辰子さん。

とないのよ」と笑うのはリーダー役の長洞辰子さん。しかし、牡蠣の養殖の仕事で培われた器用な指先からは、次々と作品が出来上がります。

東日本大震災のあと、避難所暮らしがつづき、弘川仮設住宅に入居したのは2011年6月でした。同年10月、すべてを流され、何もない生活のなか、雑巾を作ることから「いきいき教室」がスタートしました。設置したのは、宮古市地域包括支援センターです。

この「いきいき教室」の活動を、宮古市と山田町を中心に活動している、傾聴ボランティア「えがお」が支えてきました。話し相手になったり、リクリエーションを実施したりして、「いきいき教室」スタート時からサポートしています。また手芸の指導は、宮古市のボランティアグループ「野いちごの会」が分担して行なっています。



お手玉は、いわて生協マリンコープDORAにて購入可能。

「えがお」会長の菊池禮子さんは、手芸品作りについて、「最初は雑巾を作っていました。名古屋市に嫁いだ私の同級生が手芸の材料を送ってくれたのです。それをきっかけに、さまざまな物を作り始めました」と振り返ります。「いわて生協の職員の方が、被災者のために熱心に活動してくださって、作品もマリンコープDORA店で販売させていただいています。生協のイベントにも、参加させていただいたんですよ」

お手玉はこれまでいわて生協を通じて1,000個以上販売。さらにバザーなどでも販売し、それらの代金で新たに手芸の材料を購入して活動を続けてきました。

○使い勝手のよい活動費用補助

「いきいき教室」の皆さんが、なによりも楽しみにしているのは女性同士の語らいです。

盛合さんが「いつも賑やかで、最高の場所なんです」と言うと、長洞さんも「笑ったり、仕事したり、話をしたりしてね。仮設住宅は狭いから息がつまっちゃうので気分転換にもなるんです」と話します。奥さんは「これまでできなかったことがどんどんできるようになる。それもまた楽しいのです」と笑います。

手芸の材料費やお菓子、お茶などの購入には、いわて生協の「グループ活動費用補助」を活用しています。これは被災地や内陸に避難した方が5人以上集まって行なうサークル活動やお茶会などを対象に、1回3,000円（1カ月最大4回まで）を上限に補助しているものです。毎月月末に1カ月間の領収証やレシートを申請書に添付して提出。いわて生協は申請書が届いてからおよそ1週間で指定の口座に振り込みます。組合員が1人以上いればどのよ



丁寧な手仕事に目を奪われる。

うな集まりでも可能で、2012年度は36のグループが利用していました。

「えがお」のメンバーからこの制度の存在を聞いた菊池さんは、「いきいき教室」の皆さんに伝えました。しかし最初は遠慮してまったく利用しなかったそうです。「『有意義な活動をしているんだから利用させてもらいましょう』と説得しました。今は大変助かっております。皆さんの表情が本当に明るくなったんですね」と菊池さんが話してくれました。

補助金だけではありません。長洞さんは「週に3回も『にこちゃん号』※がきてくれるので、生協さんにはすごく助けられています」と話します。「ここの仮設住宅は、周囲にお店がなく、町まで12kmと離れています。高齢なので車もなく、販売に来てくださるのは大変有難いです」。いわて生協の支援はしっかり届いているようです。

※いわて生協の移動販売車。被災した地域で運行している。

○不安を抱えながらも、やりたいことはたくさん

賑やかに楽しく活動している「いきいき教室」の皆さんですが、課題もあります。スタート当時12人いたメンバーは、1人、また1人と減り現在は6人になりました。土地を見つけて家を建てる人もいれば、高台につくられる予定の復興住宅の完成を待つ人もいます。13年の夏から秋にかけて仮設住宅を出る予定のメンバーもいます。長洞さんと盛合さんは「だんだん寂しくなるわね……」と顔を曇らせます。「バラバラになっても孤立しないように今の仲間がどこかに集まって、この先もこの友情が続けば……」と願う菊池さんは、今後のサポートをどうしたらよいか考えているところです。

このように先行きには不安があるものの、「いきいき教室」の皆さんは震災から3年目を迎えてやりたいことがまだまだあるそうです。

「クッションを作りたいのです。実は明日、『野いちごの会』の人が教えに来てくれるんですよ」と言う盛合さん。「せっかく作れるようになったから、エコテープを編んだカゴをもっとたくさん作りたい」と話す奥さん。「帯から作るバッグをもう少し増やしたいですね」と語る長洞さん。きっと、今日も談話室で賑やかに活動しているはずです。



エコテープで編んだカゴ。